社会福祉法人そうそうの杜機関誌

SOUSOUSOU

想創奏

2026
No.65
3月号

シリーズ特集 家族の思いに寄り添う。

保護者の方にこれまでのありのままの思いをお聞きしました

SPECIAL 藍訪問看護ステーションインタビュー

医療ケアが必要な方の地域での受け入れ

NO.65 CONTENTS



そうそうの杜 マラソン部
バリアフリーマラソンにて

01. 巻頭言
2026年度のスタートに際して…真頼正施

02. 特集
ご家族の思いに寄り添う。…Nさん

03. 法人の活動
SSE（就職者交流会）冬の北海道旅行…手塚勇太

04. 読み物
奏海の杜に寄せて…荒川輝男
近隣の方へのインタビュー…山川真司
これまで、これからのそうそうの杜…林直輝
利用者の声…藤田照子
鴫野の魅力再発見『藍訪問看護』…アリスラボ
事業所紹介漫画『つむぎ館』…北橋惇

05. お知らせ
ジュンク堂書店出店…北橋惇
アパレルプリントのお知らせ…北橋惇
そうそうの杜メディアリスト
そうそうの杜MAP
ご寄付について
事業所一覧

關宏之氏の連載については
しばらくお休みさせていただきます。

Towards fiscal 2026

2026年度のスタートに際して

そうそうの杜理事

真頼 正施

We will create communities and societies where everyone can live vibrantly in their own way.



これからも持続可能な法人として活動し続ける。

昨年のことではありますが、11月8日から11月9日にかけて、第10回全国手をつなぐ育成会連合会全国大会東京大会に参加しました。今大会のスローガンは、「ともに生きる社会を目指して」であり、2日間にわたって全国から約2,200名が参集したとのことです。

私自身は、11月8日にカムカム新鎌田（大田区）で開催された「自分らしく地域で豊かに暮らす」をテーマとする第2分科会に、参加しました。加藤潔さん（社会福祉法人はるにれの里理事長）による基調講演を「自分らしく地域で豊かに生活する」は、「くらし」「しごと」「よか」の考え方とそれぞれの関係、「大事にしたい支援スタンス」「意思決定・自己決定」についてのお話でした。その後、「自分らしく当たり前の暮らしをするために」と題したタイトルで、加藤さんをコーディネーターとしたシンポジウムにシンポジストとして参加しました。他シンポジストとして、松村真美さん（社会福祉法人南光愛隣会　常務理事）、辻浩一郎さん（特定非営利活動法人ネットワーク・ピア　理事長）が参加し、それぞれの取り組みを報告しました。辻さんは南光愛隣会が実施する瑞宝太鼓の演者（就労継続支援A型）であり、松村さんが法人内で取り組む結婚推進・性支援教育を進める自主事業の登録者でした。松村さんからは、法人の自主事業「ぶ～け」の報告、辻さんからは実際の利用を通した「出会いから結婚」を報告してくれました。法人自主事業ゆえの苦労やスタッフの確保、愛する人との暮らしを実現するために様々な苦労があったこと、辻さん自身はプライベートな内容にもかかわらず出会いから二人の歴史を話してくれました。

私からは「地域とともに未来を拓く」というタイトルで、そうそうの杜の実践を報告しました。法人アドバイザーの關宏之さんの指導を加味しながら、荒川理事長が行ってきた城東地域活動協議会・南鴫野商店会などの各種団体との関係づくりが主な内容です。そうそうの杜の実践は、都市部における地域福祉の実践であり、人口減少地域における地域福祉とは実践の内容は異なるかもしれませんが、岡村重夫先生の「地域の福祉」の創造においては本質的な意味は変わらない。岡村先生の地域福祉を柱に、地域課題を地域住民自身が解決できるような地域…「福祉コミュニティ」の創造を目指していることを報告することができました。

シンポジウムでは、それぞれの報告を深めるやり取りや、報告者が「幸せ」を感じるポイントと、そのポイントを維持発展するために必要なことについて 話しました。コーディネーターである加藤さんが、報告者の考えや特色を引き出してくれました。いずれの法人も、障害のある人が「自分らしく地域で豊かに暮らす」ために必要性なことを、地域の中で実践している。地域性は異なっても、そこに住む人たちのために必要なことを裏付けも考えず実践し、結果が後からつい

てきているような状態は共通すると感じられた。

今回このような機会をいただき、私自身大変勉強になりました。シンポジウムにかかわっていただいた皆様、法人、資料作成にかかわっていただいた皆様には、感謝申し上げます。ありがとうございました。

昨年の楽しかった記憶を思い出しながら、2026年について考えてみる。児発・放デイ、グループホーム、就労継続支援B型の増加傾向は落ち着くのか？駆け込みでさらに増加するのか？いずれにしても、「ただ数が増えれば良い」という拡大の時代は終わった。現在、事業所に問われているのは、表面的な良し悪しではなく、障害のある人の地域生活を支えるという利用者に正直で福祉的公正の視点に基づいた、誠実な運営姿勢である。今後予想されるであろう厳しい経営環境と人手不足のなかにあっても、私たちが守るべき一線は明確である。利用者や家族が、見栄えの良さに目を奪われるのは自然なことであるが、だからこそ、私たちは「選ばれる」こと以上に、選ばれた後の「信頼の質」に重きを置かなければならない。

すべてのスタッフに求められるのは、以下の三点。

①風通しの良い関係性
スタッフ間、そして本人・家族との対話を密にし、閉鎖性を排した開かれた支援環境を構築すること。

②地域福祉の推進・地域連携の深化
孤立せず、地域社会の一部として利用者の自立を相互に支え合うネットワークを強化し、地域住民とともに地域の課題を解決に向けて実践すること。

③理念への回帰
当法人が歩んできた歴史、積み上げてきた実績、そして何より迷ったときこそ設立の理念に立ち返ること。

政治・経済・福祉の先行きが見通せないという逆風の中でも、スタッフ一人ひとりが利用者支援において高い付加価値を生み出し、支援の質を向上させることで、私たちの「労働の価値」を高めることが必要である。それが、利用者へのより良い支援へと還元されることとなり、すべての人がその人らしく暮らしやすい地域と社会を創るための好循環となる。私たちは、これからも持続可能な法人として活動し続けるのである。



INTERVIEW

シリーズ ご家族の思いに寄り添う。



今回の原稿は少し長くなりましたがたくさんの想いが凝縮されています。(荒川)

今回はNさんとお母さんの壮絶な戦いの記録です。私たちは成人期に障害のある方たちと出会い、家族の中での障害との出会い、苦労の連続、その泣き笑いに対していとも簡単に無責任な評論をしてしまうことが良くあります。しかし見本のない予期せぬ障害児との出会い孤立無援の中で、歩みを留めることなく歩いてこられたご家族の苦労を日々寄り添ってみるという機会はほとんどありません。

その意味で、今回Nさんのお母さんにインタビューさせていただき障害児の子育ての苦労を聞かせていただきました。

私は、仕事柄障害のあるお子さんのお母さんと沢山出会いがありました。そのお母さん方ほぼ全員から言われました。「私が死ぬ一日前に前にこの子が死んでくれたらいい」と、制度が進み社会が変わったとしてもその想いは否定できないものです。

でも、私も年を重ねて言えるようになりました。「その時はお母さんがチューブや管を付けて子供のことを考えてる余裕はないよ」「子供の成長発達を止めないように早く送り出して人に任せましょう」と。

生後9ヶ月の時の転倒

――息子さんのことからお聞かせください。

障害については、生後9か月の時に、転倒による急性硬膜下血腫という怪我で、その時の脳内出血で片麻痺に――というか、四肢・体幹機能の障害という病名なんですけど、それから生活が一変した、というか、そういう状況です。

頭を打った時がちょうど5月のゴールデンウィークの最中だったので、病院がなくて結構たらい回しになって。ドクターもどこも不足で。救急車で運ばれたんですけど、「ここはCTが故障している」とか、「ここはドクターがいないからうちでは見られない」って言われて、また違う病院へ。最終的にK医大に運ばれた時も、救急当番の先生だったんですね。でも先生がちゃんといてくださるので、そこで面倒を見てくださるということで入院したんですけど、やっぱりその間に

PROFILE



そうそうの杜

Nさん(40代)

2020年からそうそうの杜を利用。

どういう処置をされたかちょっとよく分からないとか言われて。結局、関西医大でも意識を失って、ICUが5日間。思ったよりは重篤になって。

退院の時には「多分、お母さんとお父さんの顔も分からないし、ゼロ歳に戻るような状態かな」という診断を受けて、かなりショックだったんですけど、実際抱いても目がすわってない状況だったので、「あぁ、ゼロ歳だな」という感じがしましたね。

麻痺は左麻痺です。頭を打った時に言語中枢のところと、バランスが悪い——ちょっとアテトーゼっぽいというか、バランスを取るのが苦手。頭を打った時は、そんなに重症ではないような感じだったんですけどね。

転倒した後は、しばらく歩けなかったんです。9か月の時にころんだので、つかまり立ちまではこの子の中では習得してたんですね。当時は両方の手が使えたんですけど、転んでからは片麻痺が強くてバランスが全然取れないんで、やっぱり転ぶんですね。立とうとしても。片方でバランスを取りながら立つっていうのはすごく難しくて、まして歩くのは習得してなかったので、すごく時間がかかりました。何回もこけたりもしてたし、頭を打ってまた病院に駆け込んだこともありますし、やっぱりずっと見張っとかないと不安な状況でしたね。

京都でのリハビリとてんかん治療

その時に入院して、退院してきてから親子の関わりが始まるんですけど、どうやって生活を重ねていったらいいのかというのも分からなくて。そしたら、入院しているところのリハビリの先生が「京都に肢体不自由児リハビリ施設がありますよ。小さいうちからリハビリしてくれる。ボバース法・ボイタ法という方法があります」っておっしゃってくださって。それで親子で京都の肢体不自由児施設というところに入ることに。母子入院訓練で親も学ぶために一緒に入院することになって。

それをしている時に、てんかん——正確には「点頭てんかん」という病名なんですが、それを起こしまして。やっぱり脳が発達しようとすれば、それを邪魔しようとするように、てんかんが現れるということで、リハビリ自体はドクターストップ。「てんかんを治さないとリハビリはできない」ということで、ACTH療法という、てんかんを治療する方法があるんですけど、それをしててんかんを止めようというので、肢体不自由児施設から京都の他の病院を紹介されて、てんかんの治療を始めました。

そのACTH療法というのは、けっこう免疫を低下させて、毎日注射を打つという、生後9か月の子には過酷な治療だったんですが、それしか方法がないということで。全然知識がなかったので、その治療自体もすごく迷ったんですけど、結局「やった方がいいかな」と思って、受けることにしました。

それで3か月ほど入院をして、一応てんかんは少し落ち着いた、ということで、またリハビリを再開。通院して京都でリハビリをしていたんですけど、小学校に上がる頃になると、住んでいるのは大阪だったので、毎日京都に通っていたら、何かあった時にやっぱり大変かなということで、てんかんの病院は大阪に。リハビリは、3歳ぐらいに「O整肢学園」というところに転科して、そっちでリハビリを。そういうのを重ねていきました。

「普通の子のようにさせたい」という思いがすごく強くて…

「歩かせたい」という思い

結局、私自身も、子どもの精神の発達とか、心の発達を成長させるというか、そういうことよりも、「歩かせたい」「普通の子のようにさせたい」という思いがすごく強くて、リハビリを鬼のようにしてましたね。関わる時間も惜しいので、リハビリばかり。施設に通って、家でもリハビリ。40分のクールを1日4回、というのが生活の中に組み込まれていて、それを一生懸命やっていましたけど…。1日中リハビリ中心の生活でした。

なぜかこの子は、あんまり食べない子だったので、結局すぐ風邪をひいたり、体調を崩して入院しなきゃいけなくなったり。風邪をひいて食べないので脱水を起こして、「入院しましょうか」ということになったり。当然、熱が出るとリハビリはドクターストップで止まってしまう。親は焦りがどんどん増してイライラする、というので、もう、すごい悪循環で。リハビリの先生から1週間休むと1ヶ月戻るとか言われて。

結局、学校に上がる前ぐらいに、ボイタ法を諦めてボバース法に変えたんです。あまり泣くことが少なくなったので。ボイタ法というのは、体を押さえて固定して、痛いわけではないんですけど、動きを私の足で押さえたりとか、いろんなことをするので、やっぱり恐怖心が出るのが子供にはよくなかった。それをしていたので、機嫌がすぐ悪くなって熱を出したりすることが多かったので、リハビリも進まない。「いつまで経ってもリハビリがうまくいかない」というので、ずっとイライラしていました。そういう状況で、心の面は置き去りになってたかな、と思います。



どうやって子育てしたらいいか分からない

ほかに親しく関わる人がいなかったんです。なにせ長男なので、どうやって子育てしたらいいかも分からないし。大阪に、親兄弟・親戚や友達もいなかったので、本当に育児を助けてもらう人がいなくて、自分の中ではすごく辛く…。

主人は仕事人間で、朝早く出かけて夜、寝静まる頃にしか帰ってこないという。それが毎日の生活だったので、子育ては一人でしてる感じですね。

だから、なんていうのかな。行き詰まったところに、違う人の声が欲しいと思った時、誰かが声を出してくれたら、違う方向にまた向けるのにな、っていうのはいつも思って。でも、それを言うと夫婦喧嘩になってましたね。だからやっぱり、育児を助けてくれる人がいなくて。リハビリに連れていく時も一人。歩けないのでおんぶして。今でこそトイレには子ども用の椅子とか置いてあるんですけど、当時はそんなのもなくて。誰かが見てくれないとトイレに行けないとか。そういうのもままならなくて、辛いなって思ったことは多々ありましたね。誰か一緒にいてくれる人がいたらいいな、とは思ってましたね。

時代のこともあるかも。今はね、小学校でも放課後等デイサービスもあるし。あの頃は、障害者の学童なんか入れてほしいって言っても「とんでもない」という感じで、学童もなかったですし。夏休み・冬休み・春休みは、完全に母一人にのしかかってくる感じで大変やったんで、暑い夏休みはやっぱり実家に連れて帰ってましたね。

私も友達がなかなかできない状況。大阪も帰ってきてから保健師さんが助けてくれることも全くなくて。どうしてなかったのかがよくわからないんですけど、多分、怪我した時点で家に帰るのが嫌で、トラウマというか、いろんなことを思い出させられるので嫌なんで病院からまた病院へ行って、その間に引っ越しをしたんですね。もしかしたら東大阪に住んでたので、東大阪の保健所から来てくれてはったのかもしれないですけど、それに巡り合えずに違うところに引っ越して。保健師さんが助けてくださることもなくて、結構大変でした。

――その中で、印象に残ってることは？

そうですね。助けてもらえる人、話を聞いてもらえる人、アドバイスをしてもらえる人、というのが、病院の先生と、入院時の相談員さんくらいやったかな。あとは学校に行き出してから。でも学校も当時は、あんまり相談できる人はいなかったかな。



療育園への入所

小学校に入る前に、1年間、単独入所でリハビリのための入所をさせました。すごく嫌がったけど、保育園の先生から「就学までに療育のところで訓練するのも大事じゃないか」と言われて、泣く泣く。本人もよく泣いてましたね。帰る時は週1回連れて帰るんですが、その都度ギャン泣き。でも「置いていってください」と言われてました。ギャン泣きでしたけど、「ちょっとでも良くなってほしい」という思いで。

入所したのは「M療育園」。そこに1年入所して帰ってきて、次が小学校、という感じですね。それが良かったのか、装具をつけたら、少し歩けるようになってきました。

当時はもう、自分の心にゆとりがなくて。

小学校時代、心にゆとりがなくて

――学校はどちらに？

T幼稚園、T小学校。健常者と一緒に、ということで入れてたんですけど、結局「養護特別学級」で一日中見てもらっている感じやったんで。本人自身も、あんまり人と関わることを喜ぶ感じがなかったので、いつも養護学級で過ごしてましたね。

そこの先生も、ちょっと年配の方で、いつもワンパターンというか……ちょっと相撲を取って、そのぐらいで一日が終わってしまう感じ。親としてはいろいろ思いとか言いたいこともあったんですけど、自分の中で押し殺していましたね。言えないまま月日が経っていた、というか。

でも4年生くらいになった頃から、すごく行くのを嫌がったんですね。もうカバンを投げたりとか。本とか忘れてきたりしたら、私が「あら、本は？ 水筒は？」と一言言ったら、「ない！」と、よくパニックになってたんですね。それを取りに学校へ行くと言うけど、「行ったって学校終わってるよ」と言っても、なんかそこが納得できなくて。「絶対、もらわなあかん」という思いが強かった。なんでそんなにこだわるのか、よく分からなかったんですけど。

だから「無いったら無いよ」と言ってしまってたんですよ、私は。怒ってたんですけど。今になると、本人の中では、他の友達が忘れ物をして怒られているのを見て、それを自分に重ねていたのかな、とも考えられるんですけど。当時はもう、自分の心にゆとりがなくて。思いやりや広い心が持てなくて、やっぱり心が狭かったなぁ、っていうのは感じています。そんな時、主人の助けが欲しかったと思います。

あの時はみんなの中に一人という感じで。朝の会と終わりの会は一緒かな。日中は特別学級。

歩けるようになってから、友達が「送ってあげるから、お母さん送迎いいよ」と言われてたんですけど、でも友達が「帰るよ」と言っても、なかなか自分のやりたいことばかり優先して、全然帰らないんですよ。友達も一日つきあってくれて…やっぱりもう「Nくんとは一緒に帰れない」と言い出して。先生も「お母さん、一緒に帰ってくれる友達がいません」と言われて。結局、私がまた送迎することになったんで。

自分の世界が好きだったみたいで。ごみ収集車がいたら立ち止まってずっと見てたりとか。車が来てマンホールに"ガタン"と当たるのが、また楽しくて、それを何時間でも見ていられるという感じがあって。人の言うことを聞くより自分の思いが大事だったんで。手を引いて連れて帰っても、外へ出たがって、ちょっと冒険で、一人で外へ出したりもしてたけど、どこへ行ったか分からなくなって。夜になって暗くなっても帰ってこなくて、探し回る、というのが毎日のように。一人ではなかなか外に出せない。暗くなってるのは自分でも分かってるんやけど、コントロールできないっていうのは小さい頃ありました。

何もしてなくても、成長する時期が来るんだな。

中学2年の時の群発頭痛

なんかね、「歩けるようになってほしい」とか、私の責任でこうなったという、辛い気持ちですね。頭の中に「普通の子にしたい」という——普通の子が何なのかって言われたら何なんだろう、と思うけど——やっぱり、ちゃんと歩けるように、ちゃんと服が着られるように、自分のことは自分でできるように、という思いがあったんですけど。小学校5年くらいかな……だんだん性格も難しくなってきて、「それはちょっと無理やな」というのが、自分の中でも、やっと理解できて。

低学年の時から、学校に行くのも嫌がるし、パニックもよく起こすので、「もう養護学校に変わりたいな」と思って。あちこち見学に行ったり、手続きもしたけど、学校の先生から「これから臨海学校とか、いろんな人と一緒にできることがある」…なんていうのかな、学校としては、「途中で変わられるのは…」というのもあったのかなって。あとになったら思うんですけど。私も途中で変わるのは勇気がいって。「せっかく仲間がいてるのに」と言われて、あんまり仲間になってるような感じではなかったんですが、「じゃあ小学校は最後まで頑張ろうか」と思って。最後まで頑張ったんですけど。

でも、5年生の時、負担があったのか林間学校から帰った日に、点頭てんかんは収まってたけど、今度は違う複雑部分発作、違うてんかんが出てきて、また治療が必要になって。入院したり、薬合わせのために入院したり。

ご飯も相変わらず食べなかったんで。中学2年くらいの時に、様子がおかしくなって、群発頭痛という診断を受けたんですが、脳腫瘍かなにかとか疑って、あちこち検査をしたんですが、原因はわからなくて。「群発頭痛がいちばん似ている症状だね」となったんですが…。それが治った時点で、だんだん食事が食べられるようになって、不思議と少しずつ体も大きくなった。その分、左右差がどんどん表に現れる感じはあったんですけど、食べたら元気にもなるし、大きくもなるなと感じましたね。

その時に「いつかその時が来るんだ」。あれだけ食べなくって小さかったのに、やっぱ食べられる時は来る。病院の先生が心配して「お母さん、病院にいれば点滴でなんとか命はつなげるんやから」。私は「食べない、食べない」としか言わないもんですから。慰めてくださいました。小学校2年生の体重と身長がずんずん大きくなりました。

「何もしてなくても、そういう時期が来るんだな」って思いましたね。群発頭痛は、痛くて嫌なもんが必要だった。頭の中で何かが起こっとったのかな。私がわからん何かが起こっとったんかなって感じはしますね。

家族のこと

——ご家族のお話を聞かせてください。

お父さんは転勤が多かった。子どもが20歳になるまでは会社もいろいろ大目に見てくれてたって言っても、兵庫・滋賀の方まで支店があって、和歌山とか、全部通勤で通ってたんですね。朝早く出て、夜遅かったりとか。時々ゴルフも。家にいることはほとんどなかった。主人としては「一生懸命協力した」と言うし、「これ以上はできなかった」と言うんですが…。でも私としては、寝静まってからしか関わる時間がなかったような……。休みは取ってくれてた"つもり"のようです。

その前も転勤であちこち。横浜、埼玉、なかなか自由が利かない。私も横浜にいる時は体調が良くなかったので、「大阪に帰る」と。友達もいるし。5年ほど横浜にいて、帰るって言って奈良に引っ越しました。定年退職してからは、今までの罪滅ぼしではないけれども、本当に前面に出て。私も体が弱くなって入院もあったので、老後が自信なかったので、私の故郷に帰りたいなと思って。主人も賛成してくれて一緒に帰ったんですけど。

一人での外出

療育園に行き出した時、最初は私が送迎してたんです。通所施設に通ってて、バスに乗ってたんですけど。だんだん送迎を嫌がるようになってきて、一人で行き出した。一人で行き出すと、私がついてくるのが嫌で、迎えに行くとすごい拒否するんですね。一人で勝手に電車に乗って行っちゃうんです。

どんどん行く。電車もバスも乗り継いで、世の中、いろんな所へ行くもんですから、帰ってくるのが深夜になる、すごい冒険。

何回か警察に保護されたりとか。ずっと電車を何本も立って見ているので、不審者に思われて。駅員さんがおまわりさん呼びはったりとか。喋れないので、うまく伝えられない。呼び出されて何度も迎えに行きました。このままでは困ると思いました。私はどうしようかな、と。

結局、お父さんが横浜に単身赴任してた時、ずーっと迷ってたし。本人はその頃も「お父さんはいなくてもいい」という感じだったので、このままだとお父さんとの関係も、やっぱりだんだん難しくなっていくやろな、って。たまに帰ってきてもあまり嬉しそうじゃないんですね。それもなんかな、と心の中では思ってた。

一人で勝手に出かけていくと思ってたら、ある日とうとう車と接触して、救急車で運ばれたんです。一人で出歩く力がまだないのに、やっぱりずっとは困る。私も単身赴任もやめて、一緒に行こうかなって。それで横浜に、二十歳の時に引っ越すことを決めたんです。子供の命を守る自信がなく。

横浜の事業所での事件

でも、それが良かったんかなと思ったら…。やっぱり、障害がある子の引っ越しっていうのは、結構ハードルが高いかなって思って。まず事業所を見つけるのが大変。横浜は福祉が発達していると聞いて、もうちょっと親身になってもらえるかなと期待したけど、やっぱり転勤族っていうこともあるのかな。なかなかしっかり相談に乗ってもらえる状況ではないし。分からないことは自分で調べて、知り合いがいないから自分で調べて、事業所をいくつか探して——っていうのもすごく大変だったし。私自身もだんだん追い詰められてきて。それが本人にも伝わったのか分からないですけど。

最終的に新しくできたところに入れてもらって、最初は喜んで行ってた。けど、精神の方との関わりで、笑ってほしくないところで、うちの子が笑ったみたいなんですね。当時は結構声を上げて笑ったりとか、わりとよくニコニコしてる子。「笑顔が素敵だね」って言われるぐらい、よく笑ってる子だったんですね。

ある日その方がつまずいたのを見て笑ったらしく。すごくその方が怒って、わーっと攻撃するようになったみたいでなんです。多分ケアはしてもらっていたと思うんですけど、私もしょっちゅう行って見ているわけではないので。

親の会かなにか、集まりに行った時、その方が私にもワッと、まくし立てるように言われました。これを毎日されてるんだ。通所をすごく嫌がり出したし。昼夜逆転して、夜起きてて。すごくいろんなことにこだわり出して、近所の人の動きとか、じっと窓から見るようになったりして。どんどんおかしくなっていったんですね。笑わなくなり寝なくなり病んできたように思い。

それで、「これはちょっと……」と思って。あの子はパニックになるという素質があったので。好きなことをやっている時はならなかったんですけど、ひどく抑えられるとパニックになる。そのパニックが多くなって。そこはやめさせて、やっぱり違う事業所に。

でも、やっぱり他の事業所に行っても、長く続けるとしんどくなる。最初は自分中心に見てもらえるけど、だんだん「みんなの中の一人」という感じになるので、それが嫌になるのか、辛くなるのか、分からないんですけど、大変になってきて。

5年ほど横浜にいて、私も体調があまり良くなかったので。

奈良の事業所での事件

大阪は無料パスがあるので、一人でどこでも行ける。それはそれで困るので、大阪の近くの奈良に引っ越したんです。奈良だと、お金を払わないと電車に乗れないんで、どんどん遠くまで行くこともないかな、っていうふうになって。

奈良の生駒の事業所は最初は行ってたけど、だんだん地元の人たちの集団になるので。そこで「あなたは仲間じゃないから、あっち行って」とか。トランプを一緒にしたいと言っても「仲間じゃないから入れられない」とか。結構、厳しいいじめにあって。うちの子に、女の子と仲良くしたい、という思いはあったので、ストーカー扱いされて、「あの子はストーカーや」とか、いろんなことを言われてたみたいなんです。そういうのが辛くて、行きたがらなくなり。でも私は無理やり行かせてたんですけど。職員さんの助けもなく追い詰められていたようです。

本人は言いたいことを私にも伝えられない。私は「ただ頑張りなさい、頑張りなさい」という感じで。なかなか、奈良でもちょっと大変だったので。それで私も体調を崩して入院したりとかして。それで主人が退職したら実家に帰ろうと思って。

父親の関わり

退職後、私の実家に帰り、今度はお父さんが全面的に助けてくれるんですが、息子が、なんでパニックになるかっていうことを、主人なりに考えたみたいなんですね。やっぱり「自分の思いが伝わらない」ことでパニックになるんだろうから、「思いに寄り添う」っていうことをいちばんに考えて。

事業所にも「こういう特徴があるので、できればマンツーマンで見てもらいたい」と伝えながらも、「マンツーは無理」。でも、できれば肝心なところは寄り添ってほしい、というお父さんの強い意志で、いろんな事業所へ。なかなか思いはうまく伝わらない。で、どんどんエスカレートしていく。

事業所の人からは単なる「わがまま」に見える。「何でも言うことを聞く親に甘えている」という指摘を受けるんですね。お父さんがやればやるほど、本人も「わがまま」を増幅させる、という感じに受け取られて。実際、私が見ていても、台風が不安で「天気予報の人に電話して台風を来ないようにしてくれ」とかね。シャッターを閉めると台風が来ると思ってしまうので、「シャッターを開けて」とか。本当に、どうにもならなくなってきた。

どこの事業所行っても、1か月ぐらいしか続かない。ありとあらゆる事業所に行ったかな。田舎は小さい事業所がいっぱいあるんですけど、行き倒すぐらい行ったかな。でもわがままに見られちゃうと、全部がダメになる。寄り添うにも限界あるし。行き詰まりもあり、田舎での生活は、完全にもう、行くところがなくなって。将来が見えなくなりました。

お父さんが一生懸命してくれてるのはわかるので口出しすると喧嘩になるし。でもやっぱり主人自体が行き詰まってくると、イライラして、あの子の前でよくないんですけど、いさかいも絶えなかったし、あんまり良い状況ではなかったと私は思ってましたね。

明るく生きることは、私の中では子育ての基本には置いてたんですけど、イライラは、育児の面では、やっぱり一致は難しかったですね。

結局、主人も疲弊して。パニックもよく起こしてたんです。でも主人は「事業所は合わないから家で見よう」と。野球が好きやから年間パスを買って見に連れていく、とか言ってたけど、それでも夜帰らなかったりとか。旅行ばかり行きたがったり、なかなかコントロールができなくなったんですね。主人も疲弊してしまって、「もう家では見れない。施設入所しかないかな」と。今度は事業所より入所先を探すようになった。

‖ 施設入所

体験入所もしたけど、全然無理だったり、どこも行きたがらなくて。大阪へ帰ってきても、事業所より施設入所を探し出して。「受けてくれるところ、どこかないか」。結局、田舎の経験で、連れて行ったのでは無理だなということが分かって、今度は「どうやって入所させるか」って考えたんですね。うまいこと、内緒で、だましてっていうことになるんですけど、最終的には。協力してくれる施設を探して入所させる。

でも、入った途端から、そういう知恵よく働く子なので、「どうやったら出られるか」しか考えていない。親も職員さんも困らして、結局「お母さん、そんなに帰らせたいなら、もう連れて帰ってください」と言われて。結局、「見れません」と入所施設からも出さされてしもたんです。

‖ 友達が「そうそうの杜は見てくれるよ」

それで、大阪で学校を卒業して、最初に行っていた系列の事業所に相談したら、「施設入所を探してくださる」ということで、一緒にあちこち見に行ってたんです。なかなか向こうも、うんと言ってくれなかったし、こちらもあんまり思うようなところもなかったし、「今の状況でどうなのかな」って。本人もそんな状況で、どこ行ってもきっとまた同じことだろうなって思って。

施設入所は諦める、私自身も「もう嫌だ」。どこか無いかな、と、ほとんど家族で遊びながら、どこか行けるところを探して。たまたま知っている友達が「『そうそうの杜』は見てくれるよ」と言ってくださって、「じゃあ行ってみよう」と思って来ました。

「うちはどんな人でも受け入れられる。最後まで、そんな方でも受け入れたい」って言ってくださる方がいて。『創奏』に入ったんですけど、やっぱり続かなくて。一回、お休み。

でもその間、私も養護学校の時親しくしていたグループでたまに出かけたりして、本人に刺激を与えて。「友達みんな、仕事してんだよ」「みんな頑張ってるよ」って言って。自分も、そういう中に行かなあかんのかな、って徐々に思ってくれてたみたいで。それで、「もう一回行ってみようかな」と思って。創奏が引っ越して、今の1階の創奏の場所に引っ越した時点で、「行ってみようかな」と行ったんです。そしたら、なんか狭くて、「自分の居場所じゃない」って見た瞬間に思ったみたいで。「やっぱ、あかん」とか言って。「どこか他のところを紹介してほしい」。で、お父さんと行くとやっぱりパニックになることが多かったので、結局、母と行くんですけど、まだパニックになることも多くて。最初の頃は行っても、外へ飛び出して——。

最初から、辛かった時のことを延々と、いろいろ話してたので。「電話はダメ」っていうのも話して。できない時でも、不安になったらそれが処理できなくて、「電話してわからないことを教えてほしい」ってことで、スタッフさんのメールとか電話を教えていただいて。分からないことは電話して聞いたりとか。時間外も対応してくださり助かりました。

なかなかすぐには、本人の中では「自分を受け入れてもらってる」という感覚にはなれなくて。いろいろありながら、でも「見捨てられてない」という安心感は、少しずつですけども、長い時間を経て、ちょっとずつ出てきて。

その後、庵にも通いながらも、「やっぱり庵の友達と同じように手厚くしてほしい」とか、いろんな要望があって。それは「できない」と言われては、パニックになって、っていうのがありながら。

思いやったり、思いやられたり

‖ 「創奏に行く」

結局、何が原因だったのか分からないんですけど、創奏に行く、って言い出して。創奏に行くと、マンツーで誰もついてなくて。むしろ自分が、やっぱり片まひがある、ということで思いやってもらえるっていう、心地の良さもあったのかな。私もよく分からないんですけど。

まあ、狭い場所は変わってないんですけど、それも受け入れて。なんとか創奏でやっていけてるし。人間関係も、私が思っている以上に「関係ができてるよ」って言ってくださるので、私はどうなんだろう、って思うこともあるんですけど。しゃべらないなりにも、言葉も少しずつ出てきてるし。しゃべってますし、実際ね。しゃべることもありますし。

そんなにどんどん成長していってるわけではないんですけど、「伝えたい」って思いが出てきている。私に対しても、支援者さんに対しても。「伝えたい」って思い。だから「ちょっと来て」という感じで呼んで、衝動的にしゃべろうとしたりとか。少しずつ成長してるかな、と思って。喜んでますし、このままの状態が続けばいいかな。また今、他、どこか行ったらね…。あの子自身を理解してくれてるところで生活する、っていうことが、一番安心できる場所なんで。

——自立度が高い人たちが周りにいて、本人も、自分でやりたいことが出てきてるのかな。

そうですね。頑張りたい、というふうに出てきてる。やっぱり「思いやったり、思いやられたり」の関係が。今までは「思いやってほしい」ばっかりやったけど、思いやることもできたらいいかな。コーヒーを入れてもらって「ありがとう」。嬉しそうにするのを見てたら、こういうので関係性が構築されていくのかな、

って。以前は本当に限られた枠の中でしか、この子は生活できない、って思ってたので。もう本当に、この小さい枠の中で。そっからはみ出たら、大変になる、と思ってたので。それをコントロールできるようにはならへんのやろか、と思ってたんですけど、少しずつ、いろんなことが我慢できる、コントロールできるようになってくるんやな、っていうのが、ちょっと思ってます。嬉しいですね。

多分、人との関わり方も増えて、みんなそれぞれ「我慢しなあかんことは我慢してる」んやな、と自分で感じてくれてるのかな、と思うんですね。だから、人と関わるというのも大事かな、と思っています。

大変な時に寄り添ってほしい

‖ 一緒に生活している方が元気で楽しく

――最後にそうそうの杜に一言を。

やっぱり、みんなそれぞれ大変な思いとか、大変な時期を過ごしてきてると思うんで。やっぱり大変な時に、どういうふうにやっていこうかという対処方法とかを、一緒に考えて、寄り添ってほしい。大変な時は孤独になりがちなんで。「自分だけがなんでこんなの？」「どうやったらいいの？」「どうやってここ乗り越えたらいいの？」人に依存したくなるくらい、大変な時ってあるので。そういう時に一緒に考えてほしいし、見捨てないでほしいな、と思います。

でも、中で働いている人たちがしんどかったり、しんどそうにしてはったら、やっぱりなかなかそういうふうにうまく回ってこないので。やっぱり中で一緒に生活してくださっている方が、元気で楽しく――というのも基本かな、と思います。大変な時期こそ大事かな、と思います。



※写真はイメージ画像です。

スタッフからのコメント

‖ 相談支援専門員　林

2020年2月の初回面談で色々と根掘り葉掘り聞いた挙句、初対面にもかかわらず、「お母さんはちょっと黙っててください」と言った事を覚えています（笑）だまし討ちのように施設に入れられたこともあり、その場で「そうそうの杜で関わっている間は絶対に施設には送らない」ということを約束してもらいました。

私たちの関わりが特別なものだった訳ではなく、本人の発信に応え、小さな不安を先延ばしにせずその場で解決する。ただそれだけ。水が合う・合わないはもちろんあるのでしょうが、毎日通所し、行事ごとにも参加してくれるようになり、旅行も不安の訴えなく行けるようになるとは出会った当時は想像できませんでした。

三歩進んで二歩下がるを地で行く、むしろたまに四歩下がることもある方なので、ご両親はずっとやきもきされていたと思います。しかしつい先日、驚くべきことに本人から「GH、行く！」という発信がありました。どこに着地するか分かりませんが、エンパワメントされ続けている本人のこの先をとても楽しみにしています。ご両親やスタッフのことは気にせず、これからも己が道を突き進んで欲しいものです。

しかしその本人の礎となっているものはご両親からの愛情であることは疑いようがなく、同じ親として頭の下がる思いです。

最近は少なくなりましたが、お母さん、本人の言葉は遮らないようにしてくださいね（笑）

‖ 創奏　サービス管理責任者　田島　直人

最初の出会いは私が庵で勤務していた時。とにかく最初の印象は不安そうな顔。苛々したり自分の想いが通らないと飛び出したり、時には自転車や物を投げたり、彼なりの訴えだったのだが当初はなかなか想いをくみ取ることが出来なかった。とにかく不安を取り除こう、自分を見て欲しいという思いにどう応えるかの毎日だった。専用のノート、カレンダーに関わる人と時間を保証して過ごして貰っていた。また母も毎日電話やメールでの確認。しかしそれで不安な表情は段々消えていき変わっていくのである。この間私は創奏へ異動になった。

ある日創奏に行きたいという想いを伝えてくれた。我々が考えたことは、不安を軽減してここに居ても良い、居たいと思ってくれる事。創奏を本人の居場所にするという目標を第一に掲げた。

作業や店番等の活動を、役割や工賃や手当に紐付けてルーティンにした。行動に対して肯定し、行った事に対しては大いに褒めた。加えて1日の中で筆談しながら話す本人との時間を必ず保証した。

こうした環境を作ると見違える様に積極的になり、自分からの発信が増えた。彼は本当に周りをよく見ている。活動や発信等を他の皆と同じ様にするのが嬉しかったみたい。彼の世界が広がったと感じている。当初の顔とは一変、毎日笑顔で来てくれている。居場所と感じてくれている様だ。最近はいい意味で母の電話は減りつつある。

奏海の杜に寄せて

2026年 3月11日で東日本大震災から 15年がたちました。震災が発生した時に居ても立ってもおられず、4月から宮城県南三陸町を中心に被災地支援に動き出しました。結果的に2013年までの3年間は年間通して二人ずつ派遣してボランティア活動を行ってきました。今更ながらスタッフがいろいろな負担をものともせず協力してくれたことだと感謝しております。

結果、地元にNPO法人奏海の杜という新たな資源を設立する手伝いができました。

ところが、この間にいろいろ状況も変化し、奏海の杜も新たな衣替えをせざるを得なくなり、地元の社会福祉法人に経営を譲渡することになりました。

我々にとっては、様々な想い入れのある奏海の杜でしたが、我々自身もあの東日本大震災の復興支援ということで、一区切りをつけることになったのかなということです。

わずか15年に満たないNPO法人奏海の杜の活動でしたが、沢山の方々の心に思い出を残してくれました。奏海の杜の成り立ちから締めまで関わってこられた太齋さん、小野寺さんほか、関わってこられた利用者、ご家族、関係者の皆様大変お疲れさまでした。



奏海の杜の機関誌から特集記事を
掲載させていただきます。
関係者の皆様ありがとうございました。

そうそうの杜 理事長

荒川さんに聞きました。

そうそうの杜は、大阪市城東区で活動する社会福祉法人です。「奏海の杜はそうそうの杜の東北支社です」と自己紹介するほど、その支援方法や理念で大変お世話になってきました。そうそうの杜の第一義の目的は、障害があろうとなかろうと地域の中で当たり前の暮らしを実現すること。そして現在では城東区で１００人以上の障がいのある人たちの地域での生活を応援しています。一人ひとりの生活を考え抜いた先に地域が作られていった、その過程を荒川さんに伺いました。



当たり前の暮らし

僕は、地域を意識してやったわけじゃないよね。ただ、障害があっても、生まれ育ったところで生活できたらいいし、障害があるからって家を離れてね、集団の、わがままは言えない、お金も自由にならない、そんなところになんで入れ込まれなあかんのやという、そういうところから始めてるんやね。



種をまく

出会いを大事にして、「とにかく種をまきましょう」って続けてきた。今は繋がらなくても、５年10年後に繋がればいいよね、というケースがいっぱいあった。福祉の枠組みで取り込もうとしたら拒否する人たちが多い。ずっと拒否され続けて、でも今は６０過ぎてちょっと体力なくなってきたから、（そうそうの杜に）通ってる人もいる。その代わり僕の顔見たら悪態ついてるね、「あんたが悪い」とか言って。地域で自分の力で生きてきた彼の誇りを感じることが多々あるね。

そうそうの杜の運動

障害のある人の権利を主張する、獲得するために声を上げ活動することが、障害者運動のテーマだと思うけれど、そうそうの杜の運動は、障害のある人が地域で住み続けられるとか、そういうのを広げていくのが、自分自身の運動かなと思ってる。そうそうの杜は日中支援型のグループホームができたときに、施設化したグループホームは認められないという趣旨から、グループホームをやめた。法人で普通の住宅を借りたり作ったりして、そこへヘルパーを派遣して、医療的ケアが必要な人も、１００人以上の地域生活に関わってる。トラブルがあれば調整しにいくしね。一人ひとりの当たり前の暮らしを支えることが、そうそうの杜の地域生活支援かな。



地域への思い

昔、障害のある人らが声あげて駅のエレベーター設置を実現したやろ。あれは今や高齢者も妊婦さんも、いろん







な人が恩恵を受けてる。つまり、彼らがやってきた障害を軸にしたことは、結局みんなの暮らしやすさにつながる要素がかなり多いんやね。僕も、障害ある人が地域で当たり前に暮らせるように支えながら、それが結果的に地域全体の暮らしやすさにつながる、そんなご奉公をしていきたいと思っているね。

そうそうの杜では、福祉は単なるサービスではありません。日々の食事や散歩、買い物など、利用者とスタッフが対等な関係で共に暮らすことを大切にしています。年末年始一緒に年越しをする関係もあるそうです。マニュアルに縛られず、一人ひとりに合わせて必要なことを一緒に考え、信頼し合う関係のなかで自然と支援が生まれるとのことでした。仕事としてではなく、人として出会う——それが、そうそうの杜のスタンスであり、温かく穏やかな暮らしを共に作る姿勢が、支援の心。改めて、一番大切なことは目の前の人とどう関わるかだと、教えていただきました。

「(服をすぐに脱いでしまう利用者がいて)いくら言っても本人が脱いでしまうのだから、素っ裸でもしゃーないよ」とか、「それは本人が悪いんだから」とか、障害や障害の重さを理由に「仕方ない」と片づけるのは無責任やと思う。本当は、その行動に至るまでの過程や前提があり、やむを得ずそうしている場合も多いよね。だからこそ、本人の行動の背景を丁寧に見て、どうアプローチできるかを考えて欲しいと思う」

荒川 輝男

平成７年無認可作業所「創奏」を、大阪市城東区で、利用者１名スタッフ１名でスタート。平成13年「社会福祉法人そうそうの杜」として正式に法人化し、入所型ではなく地域生活を重視した支援を進める。事業運営の基本として、福祉と地域、そして暮らしを結び直す拠点として、その理念「そうそうの杜は、すべての人がその人らしく、生き生きと暮らせる地域と社会を創っていきます」のもと実践を続けている。

web



SSE（就職者交流会）

冬の北海道旅行







2025年11月27日～29日

手塚 勇太





SSE会（就職者交流会）のメンバー　19名　引率　4名の合計23名で北海道　札幌方面に社会見学に行きました。
今回の企画は費用の一部を大阪生活サポート協会に助成していただいた企画です。

1日目から北海道は温かく、北の国に降り立ったという感覚はあまり感じられなかったが肌寒い程度でとても過ごしやすい気候でした。1日目は2チームに分かれて社会見学へ行きました。

一つのチームはエスコンフィールド北海道まで行き、球場の裏側やどういったところでプロ野球の選手たちが過ごしているのかを見学させていただいた。実際にベンチに入って選手さながらの写真を撮れたことは良き思い出です。

もう一つのチームは白い恋人パークまで社会見学へ行きチョコレートづくり体験を通じてモノづくりの楽しさを感じられる機会を体験することができた。

夕食は2チームとも合流し、北海道名物ジンギスカンを食べた。
ジンギスカンを食べるのもほとんどの人が初めてで、ラム肉のあまりのおいしさに牛や豚はそっちのけで何度もラム肉をおかわりしていた。

2日目は旭山動物園まで観光バスをチャーターし、全員で行動した。
旭山動物園はあいにくの雨でしたが、逆に動物たちが屋内にいたことで色々な生態系を観察することができた。
トナカイやキタキツネ、ユキヒョウなど大阪では見る事のない動物たちをたくさん見ることができ、参加者たちも大満足であった。
旭山動物園に行ったあとは、札幌市内へ移動し観光した。
有名なテレビ塔や時計台の前で思い思いに写真を撮り、北海道ならではの景色や建物を楽しむことができた。

2日目の夕食は海鮮居酒屋で海鮮料理を食べた。
刺身に貝にカニとありとあらゆる海鮮がコースにて提供され、みなさん幸せそうでした。
最終日はノーザンホースパークという牧場まで社会見学へ。
歴戦の名馬（サラブレッド）が厩舎の中にたくさんおり、実際に乗馬体験・馬車への乗車など北海道の大自然を大いに満喫することができた。
昼食は新千歳空港で海鮮丼を食べた、今まで食べてきた海鮮丼に対する認識が変わるほどおいしく参加者全員が「おいしい」と笑顔であふれていた。
その後、空港でお土産を買い大阪に戻ってきた。

今回の旅行を通じて今後は海外も視野に入れ、さらに参加した人たちの生活の質をあげられるような活動をしていきたいと思う。



就職者交流会





INTERVIEW

NO. 6

いつもお世話になっております／近隣の方へのインタビュー



第一印房
仲河 司郎さん
鴫野と共に歩んで80年。
一級印章彫刻技能士による手作り印章。

山川：お店をされてどれくらいの期間になりますか？
仲河さん： 私は2代目なんですよ。先代から言うともう80年になります。私が22歳の時に親父が亡くなって継いだので、私の代だけでもう55年ですね。
―55年ですか、ご苦労様です。ここ10年、20年で駅周辺の開発も進み、JRおおさか東線もできましたが、一番変わったと感じることは何ですか？
やっぱり地下鉄ができて、そういう面では便利な街になりました。ただ、便利にはなったけれど、地域にとっては「乗り換えの場所」になってしまっているんですよね。
―便利になった一方で、思うところがあると。
人口が増えたり、集客が増えたりといったメリットを、商売人としてはあまり感じないんです。地下鉄ができても、みんな中で乗り換えるだけで、外に出て街を歩くという人がなかなか増えていないのが現状ですね。もっと人が行き交う街になってほしいなと思います。
―昔の鴫野の雰囲気や、商店街はどうでしたか？
昔はこの駅前の通りも、私らのように「住まいと店舗が一緒」という店ばかりで、コミュニティが多かったです。今は店舗だけを借りる形が増えて、店主は若返ったしチェーン店も増えたけれど、コミュニティとしての繋がりは少し薄れたように感じますね。
―鴫野らしさが残ってほしい風景や、暮らしやすさについてはどう感じますか？
日々見ているものなので極端な変化は感じませんが、雰囲気や景色はあまり変わっていない気がします。買い物も比較的安いですし、下町らしい住みやすさはありますね。
―鴫野の人の「気質」を一言で表すと何でしょうか？
「情が深い」ということでしょうね。地域に根ざして長く商売をさせてもらっているからこそ、そう感じます。
―商売を続けていく上で、こだわっていることは？
「ハンコ」という日本の文化を守ることです。今はデジタル化で認め印などは減っていますが、エジプト・中国から続く歴史があり、公的に印鑑を使う文化は大事にしていきたいですね。
―今後の鴫野がどのようになっていってほしいですか？
隣の蒲生で行われているような古民家のリニューアルのように、街を活性化して新しい人が入ってくるプロジェクトがもっと増えてほしいです。もっと多くの人が地上に出て、この街を歩いてほしいですね。
―今後、私たち「そうそうの杜」が鴫野で活動していく上で、ご意見はありますか？
障害がある方への社会全体の見る目は、以前に比べて「一人の人間」として見るように変わってきました。地域の中に活動の場があることで接触が増え、誤解が理解に変わっていくはずです。
―偏見を持たれてしまうこともあるかと思いますが、どう関わっていけば良いでしょうか。
理解できる人ばかりではありませんが、中にどんどん入っていきやすい雰囲気を作ることが大切ですね。
―これから「そうそうの杜」に期待することはありますか？
今の鴫野に求められているのは「祭り事」です。商店街の行事が減っている中で、去年やっていた「しぎのフェス」のようなものは、子供たちも本当に喜んでいた。ああいう取り組みこそ、街の活気のためにどんどんやってほしいですね。「そうそうの杜」さんには本当に期待していますよ。頑張ってください。
―ありがとうございます。そのお言葉を励みに頑張ります。



今回、突然のインタビュー依頼にも快くお受けいただき感謝しています。
また、不躾な質問にもちゃんと説明もいれて答えていただけたことで、自分にも改めて知れたこともあり、これからの鴫野でちゃんとやっていかないといけないと考えさせてもらいました。
本当にありがとうございました。

第一印房
大阪市城東区鴫野西5-16-23
06-6961-1021
営業時間：9:00～18:30

特集



これまでのそうそうの杜
これからのそうそうの杜

ベテランスタッフ、新人スタッフに、
それぞれの目から見たそうそうの杜を
語っていただき、多角的な視点から
そうそうの杜の歴史を創る新企画です。



＼勤続19年／

林直輝

profile

所属　あ・うん

好きなもの	何もしなくて良い時間
行ってみたい場所	屋久島
人生で一度は やってみたい事	雪山登山

ひとこと　穏やかに生きていきたいです



これまでのそうそうの杜



地域生活支援センターあ・うん　林 直輝

本当は私の方が利用者に遊んでもらい、生活に彩りを添えてもらっているんだろうな

そのうち回ってくるかと思っていた原稿の作成依頼が意外と早く回ってきました。気付けばそろそろ勤続20年目に足を踏み入れようとしています。面接で私の履歴書を見た荒川さんが「僕、パソコンできる人は信用しないんだよね（林の前職はIT関連）」と言い、履歴書をテーブルの上に軽く投げ置きました。それを見て「何なん、この失礼なオッサン」と思ったことをよく覚えています（笑）。

未経験なのでまず人柄を見てみたいということで、3日間の実習を行うことになりました。私としても現場を見ることが出来るので有難いと思いました。つむぎ館で消しゴムの作業をしていた時、あまりにも単調過ぎてウトウトして、Yさんに「も～、仕事中に寝ちゃダメだよ」と当たり前の声掛けをされ、庵での実習を終え、帰路に就いたところで後ろからスタッフのKさんに「信号無視をするな！」と全力で怒鳴られ、げんげんに行くと小学生かと思う男性がタバコを吸っていたり、距離感が近い人多数。それまで知的障害のある人との関わりは無かったこともあり、新しい世界がそこにあるのを感じていました。

色々あったものの、実習はとても楽しかったことと、「現場に出ればあの失礼なオッサンともそう顔は合わせないだろう」と思い、働いてみたいと返事をしました。すると返って来たのは「パソコンができるみたいやから本部勤務で。ヘルパーにも少し入ってもらう」という言葉でした。「毎日顔合わせなあかんやん」とこれから先のことを憂鬱に感じたのも今となっては笑い話です。

5年程経った頃、どっぷりと関わることになるケースの担当になりました。自分が時間をかけて真っすぐに関わればきっと彼は変わると信じて疑っていなかったのですが、結果はというと、どれだけ時間をかけて関わっても、休みの日に話をする為だけに出勤しても、終電を逃す時間までGHで話をしても彼が変わることはありませんでした。そこでようやく一人での関わりの限界と人一人が変わることの難しさを知る至りました。我ながら若いなと微笑ましく思います。

それから年数が経つにつれ、良くも悪くも色々なことに慣れてしまっている面があります。視点や立場が変われば見えなくて良いものまで見えてしまうもので、ただただ目の前のケースに向かっていた時の真っすぐさが無くなっていやしないかと思うこともあります。今、当時と同じケースに出会っても同じ感じ方はできないだろうと思うと少し寂しいものがあります。AIに聞いてみると「それは成熟です」と良いように答えてはくれるものの、それを喜ばしいものだとはどうしても思えません。

そうそうの杜はどんどん規模が大きくなってきています。利用者もスタッフも、関わりの範囲も。規模が大きくなると組織としてそれぞれの役割が分かれてきます。そして無意識に互いの境界線を引いてしまいがちになり、それぞれの領域が重なる大事な部分が抜け落ちてしまうという本末転倒なことになっていやしないかと不安も残ります。

当時も今も地域生活が理念に据えられています。荒川さんや關さんには怒られるかもしれませんが、ぶっちゃけて言うと理念を意識して働き続けている訳ではなく、20年近く居座ってしまったのは利用者との出会いが楽しかったからというシンプルな理由です。私にとっての「あの頃のそうそうの杜」とは私が一番楽しく感じていた頃のことを指します。いつの間にやら身に纏ってしまった余計な物は脱ぎ捨てて、いつでも「あの頃のそうそうの杜」を感じられるような心持ちでいたいと思います。そして無駄なこと、やらなくても良いこと、しょうもないこと、何でもない当たり前の関わりが生活にほんの少し彩りを添えるのだと思います。誰にとっても、それらを自ら進んで楽しくやれるような気持ちの余白を育むことのできるような場所であって欲しいと思っています。書いていて気づきました。これ、理念に繋がっていますよね？どうやら怒られずに済みそうです。

原稿も書き終わったので、どこかの事業所に行って利用者にちょっかいかけてこようと思います。本当は私の方が利用者に遊んでもらい、生活に彩りを添えてもらっているんだろうな、と思う今日この頃です。



利用者の声

No.4

『そうそうの杜』設立以前のライトハウスから

私は平成5年ごろから当時蒲生4丁目にあった創奏に通所し始めました。それ以前に日本ライトハウスにいたこともあり、荒川さんとはそこで出会っています。

そうそうの杜に来てからは思い出しただけでも創奏から始まり、つむぎ館や今福作業所、そして今通所している庵などたくさんの事業所にいました。

今でこそ生活介護の庵でのんびり暮らしていますが、それまでは就Bの利用者として、多くの利用者と一緒に作業をしていました。どんな作業をしていたか細かく思い出せなかったので、今通所している庵の長老？スタッフの西さん（当時今福作業所で一緒に作業をしていた）と話しながら一緒に思い出してみました。

・クッキングヒーターの盤を磨く
・配線の皮むき
・はんだ
・ビスの袋詰め
・頭に巻くカールの輪っかをはめる、シールをはがして袋に入れる　など

多くの事業所でたくさんの事を経験してきましたが、視覚障害の為にこける事が多く、頸椎を損傷して車椅子で生活することになりました。そこからは就Bではなく、現在の生活介護の庵に通所しています。

昔は作業がたくさんあって大変だったけど、庵はのんびり過ごせてリラックスでき、日中活動などしながら楽しく過ごしています。日中活動は毎日午後から行い、カラオケやWii、散歩など楽しんでいます。

トランプをみんなでして楽しかった思い出があります。最近は塗り絵も楽しんでいて、色々な季節の行事や花などの絵を塗っています。

今年3月にいちご狩りに行きました。去年は関西万博にも行けて楽しい思い出ができました。今後機会があったらピザやグラタンを食べてみたいのでレストランにいけたらいいな、と思っています。

庵は時々クッキングなどもしていて、クッキーにたくさんチョコレートをかけて食べたいでので、今度するならクッキー作りがしたいですね。



藤田照子
庵

そうそうの杜のいいところは楽しいところ

そうそうの杜のいいところは「楽しい」こと。運動会などの行事も楽しい。去年の年末の餅つきでは臼の中の餅をひっくり返していた荒川さんの手に私が振り下ろした杵が当たりそうでした（笑）

一昨年から私はグループホームで過ごしています。グループホームの中にも一緒に庵に通っている人がいて楽しいです。そうそうの杜では仲のいい利用者もいます。いろいろ喋りたいし、楽しく過ごしたいので、これからも健康で過ごせるよう頑張りたいと思います。

生活介護　庵
送迎・入浴・食事の提供
文化的活動
リフト浴が出来る機械浴と一般浴と大小２つ入浴できる風呂があり、個々人にあわせた様々な入浴に対応しています。

鳴野の
安心をつくる

鳴野の魅力再発見

no.3

インタビュアー
アリスラボ

利用者による取材で
鳴野の魅力を
掘り起こします

藍訪問看護ステーション

大阪府城東区鳴野東3-3-2
TEL：06-6185-9885



鳴野東の頼れる訪問看護

★鳴野東エリア

中島秀樹
私も毎週金曜日に坪田さんの訪問看護を受けていますが、生活面や健康面で色々指導してもらっていますが頭が上がりません（笑）。そんな坪田さんにはやぶさテラスでお話を伺いました。





西野真梨恵
私もお世話になっている藍訪訪問看護さんにインタビューをしてまいりました！ どんなお話が聞けるのかが楽しみです。

松下美咲
私自身は藍さんを利用してはいませんが、それでも出会った際には気軽に声をかけてくださります。はやぶさテラスがどういう場所なのか、訪問看護さんがどういう活動をしているのか沢山貴重なお話が聞けました。



医療的ケアが必要な方を地域で受け入れ続ける

松下　このインタビューの場所にもなっているんですけど、新しくはやぶさテラスという場所ができましたが、この場所はどうでしょうか？

坪田　この場所は、上の階に居るお一人の方の場合だと、入院して施設に入ってそうそうの杜に帰ってくるってなった時に医療依存度が高くて、医療的ケアの大部分を占めるっていうので、そこは介護福祉の方では役割が難しく、違いますよね。なので、受け入れるのが難しいというのもあって、一時は荒川さんも受け入れられないなっていうのもあったんだけれども、看護師が入って一緒にケアをさせていただくことで、いろんな人がお家に帰ってこれる場所です。今日もね、退院して本来は病院をずっと転々と行かなければいけないような方も地域に、お家に帰ってこれるっていう、本来だったら帰ってこれない方たちを迎えられる場所がひとつできてそこで一緒にお仕事をさせてもらえるっていうのは、私たちも本当にありがたく良い時間を過ごさせてもらってます。

荒川　はやぶさテラスが5月の25日からスタートしてるんやけど、ほぼ泊まり込みで昼も夜も寝ずに仕事をしてくれはっていて、だからこの中のことは坪田さんが一番よく分かってるのかな。そういう意味ではさっき言ってくれた、一生病院で過ごしてそのまま亡くなってしまうような方たちをこういう場所で引き取れたのはすごくありがたいなぁと。藍さんがやってくれるからそれができることでね、それはすごくありがたい。

坪田　いえいえ、でもね、看護師が居るからじゃあできるかって言ったら、そうではなくて。私たちだけではどうしようもできないんですよ。そこにはそうそうの杜のスタッフの皆さんが居るからこそ、一緒だからできることです。

荒川　まあ、そうそうの杜としては高齢化の問題、もっと先だろうと思ってたんやけどね、医療的なニーズが高くなったというのが予想以上で、はやぶさテラスもそれ用に作ったわけじゃないからやむを得ず、そういう医療的なケアの高い人たちをなんとか病院の天井をみて生活するんじゃなくて、地域の中で生活してほしいという想いで。それが藍さんとの連携で可能になったから、今後もっともっとたくさんの人がね、そういうことができればなあと思うんやけど、多分医療と福祉がこういう形でしっかりと結びついて、医療的ニーズの高い人を地域で見てるケースって、僕はないんじゃないかなと思うんやけどね。だからそれを成功させたいので、今後も協力してもらいながらやっていきます。

西野　訪問看護のお仕事をされるきっかけはありますか？

坪田　介護福祉の仕事をしていて、お家に行った時に、その時はヘルパーだったんですけれども、訪問看護師さんが来られていて、みんなで役割は違いますけれども、お一人お一人の、一緒に楽しく時間を過ごせるのがいいなと思ったからです。

西野　ありがとうございます。次の質問です。鴫野に来られたきっかけはありますか？

坪田　私、前の前職も訪問看護師をしてましたけれども、前職の時に縁があって荒川さんと出会いました。荒川さんはじめ、そうそうの杜の皆さんと一緒にお仕事をさせていただきたいなと思って、場所を荒川さんと一緒に探しました。

西野　ありがとうございます。訪問看護の事務所にはどのような方が来られますか。

坪田　一番多い人は荒川さん。あとはそうそうの杜のスタッフの方、ケアマネージャー、計画支援相談員、ヘルパーの方、他職種の方が来られます。

荒川　一番多いのは邪魔しに来るそうそうの利用者。

坪田　はい、あと利用者も、創奏が隣にありますけれども、あと座座の利用者の方、あと、つむぎ館の人、遊びに来てくれます。

西野　次の質問です。体調の悪かった際、深夜でも駆けつけてくださってましたが、そういうのって結構大変なことはないですか？

坪田　ないです。全然なくて逆に心配だからね。早く行かなくちゃとかスタッフはみんなそういう気持ちでいてます。

西野　ありがとうございます。次の質問ですが、私自身がお絵かきカフェの展示をさせていただいてたんですけど、その時もちょっと来てくださってありがとうございます。よかったら絵の感想とかもお願いします。

坪田　こんなお絵かきカフェあるんだ、心斎橋の近くのお店にね。これは西野さんと出会って、この絵の世界を知ったということなんです。私の今まで本当に知らなかった世界がそこにあってお家に行くたびに、いろんな話をしてもらって。イメージがどんどん膨らんでいって、私の中ですごくその話が私は自分の引き出しが一つ増えるみたいな感じで楽しかったんですけれども、お絵かきカフェにこの日は行くんだとか、行ってきたとかいう話も聞いて、お絵かきカフェがイメ

坪田 真佐美
明るく頼れる藍訪問看護ステーションの管理者



ージがすごく膨らんでて、ある日展示会をするっていう話を聞いて、それはぜひ、見に行きたいと思いました。

西野　次の質問になります。質問といいますか私の気持ちなのですが、前にちょっとぬいぐるみの製作をさせていただきまして、使っていただきましてありがとうございます。感想をお願いします。

坪田　感想はですね、ありがとうございます。エメラルドグリーンが私一番好きな色で、すぐ目に止まっちゃって、お顔見たらかわいいこと。一人一人お顔違ってねかわいいですよ、癒やしやね。うちのスタッフも、買わせていただいて、大事に使わせてもらってます。

西野　ありがとうございます。

中島　訪問看護をして今までの中で良かったなと思うことはなんでしょうか？

坪田　たくさんありすぎて困ったなという感じで、何かこれが良かったっていうのではなくて　日々、中島さんも西野さんもそうですけれどもお家に行かせてもらって、その時間を一緒に過ごせるっていうことが、一番私はありがたい時間だなと思ってます。

中島　僕も西野さんもねこうやってお世話になってましてね。

坪田　ありがとうございます。

荒川　中島君の部屋が綺麗になっているのが、一番良かったなと思う。綺麗ならへんか。

中島　いえいえいえいえいえ。

荒川　あのね、時に怒ってね。お部屋片付けなさいとか言ってね。一緒に片付けようねって言ってね。あんまり言ったらあかんな。はい 以上です。

人生をしまう時に一緒に居らせていただけること

中島　逆に、訪問看護をして辛かったことっていうのはありますか？

坪田　まあ、やっぱり、私たちは、利用者の方の、人生のね、終う時っていう時も、一緒に居らせていただくことがすごく多いです。まあ、その時は、やっぱり、人間なんでね、悲しいし、涙も流します。ただ、人生の終う時に、一緒に居らせていただける、まあ、言葉がちょっと違いますけれども、いい時間かなとも思いますし、ご家族の方ともね、一緒にこう、お見送りできたりとか、そういうのも、いいのでね、辛いし、ありがたいし、両方です。

中島　今後、訪問看護で、やりたいことっていうのは。

坪田　うーん。たくさんあるんだけどな。これ、また困ったな。訪問看護でやりたいこと。

荒川　これまた、あの。中島君の部屋をきれいにする。

中島　いやいや、それを置いておいてですね。

坪田　そうそうの杜と一緒にお仕事をさせていただいて、この間も大運動会がありました。私たちは訪問看護というお仕事はだいたい30分から1時間も居れないぐらいですかね。だいたい30分ぐらいで 失礼することが多いんだけれども、訪問看護というのはそういうお仕事です。でもこの間も大運動会にいて本当に楽しかったんですね。こんなに長い時間同じ時間を過ごせるっていうことがすごく嬉しくて楽しくてだから私たち訪問看護ではなかなかそれが難しいんだけれども、また荒川さんのお力を借りてそういう時間が作れたらすごく嬉しいなと思います。

荒川　それはもう。

中島　そうそうの杜とタイアップみたいな感じ。

坪田　そうですね、私たちはそんなに大きな会社ではございませんのでお力を借りてということで置いておきましょうか。

中島　ありがとうございます。





事業所紹介漫画シリーズ

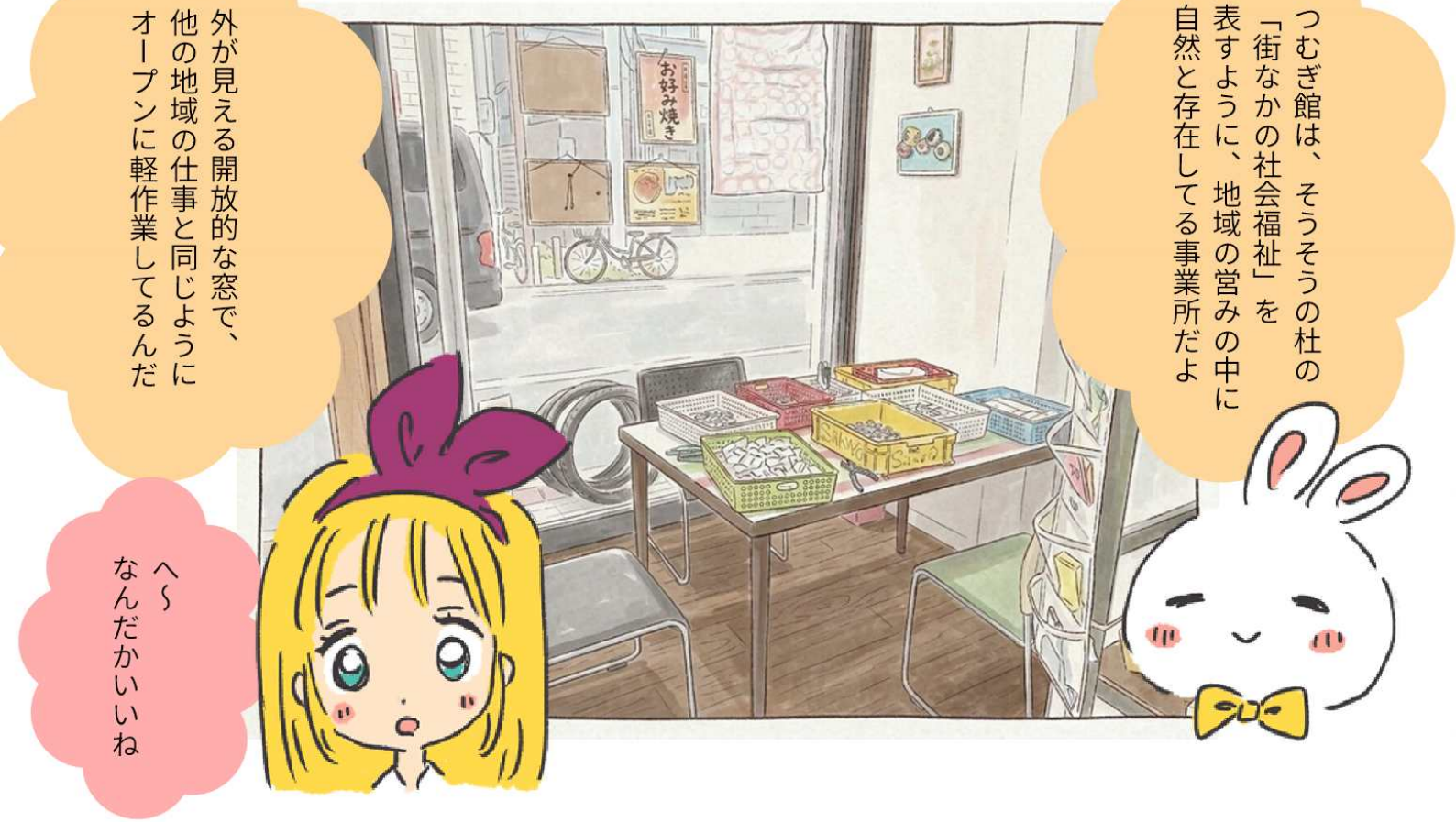
つむぎ館

B型事業所
18歳から利用可能



おいもの国のアリス
Alice in Potatoland

漫画・北橋惇



事業所の中は、
家みたいな感覚で
みんなじっくりと
作業に取り組んでるよ

クッキングとか旅行、
楽しく過ごせる
イベントも盛り沢山！

ひとりで集中できる
個別スペースもあるよ！

作業
しやすそう！



B型って
そうそうの杜に
たくさんあるけど、
どう違うの？



つむぎ館はね、
B型だけど
遊び心いっぱいの
事業所だよ

仕事も大事だし、
それぞれが生き生きと
その人らしく生きることも
大切にしてる



これは引っ越しの時、
みんなで障子に絵を描いたもの
心を潤すアート活動をしてるよ



なんか楽しそう〜！

そうそうの杜には
たくさん
事業所があるから、
それぞれの事業所で
実習を請け負ったり、
人生で働くステージが
変わるにつれ、
ぴったり合う場所に
移動できるんだ

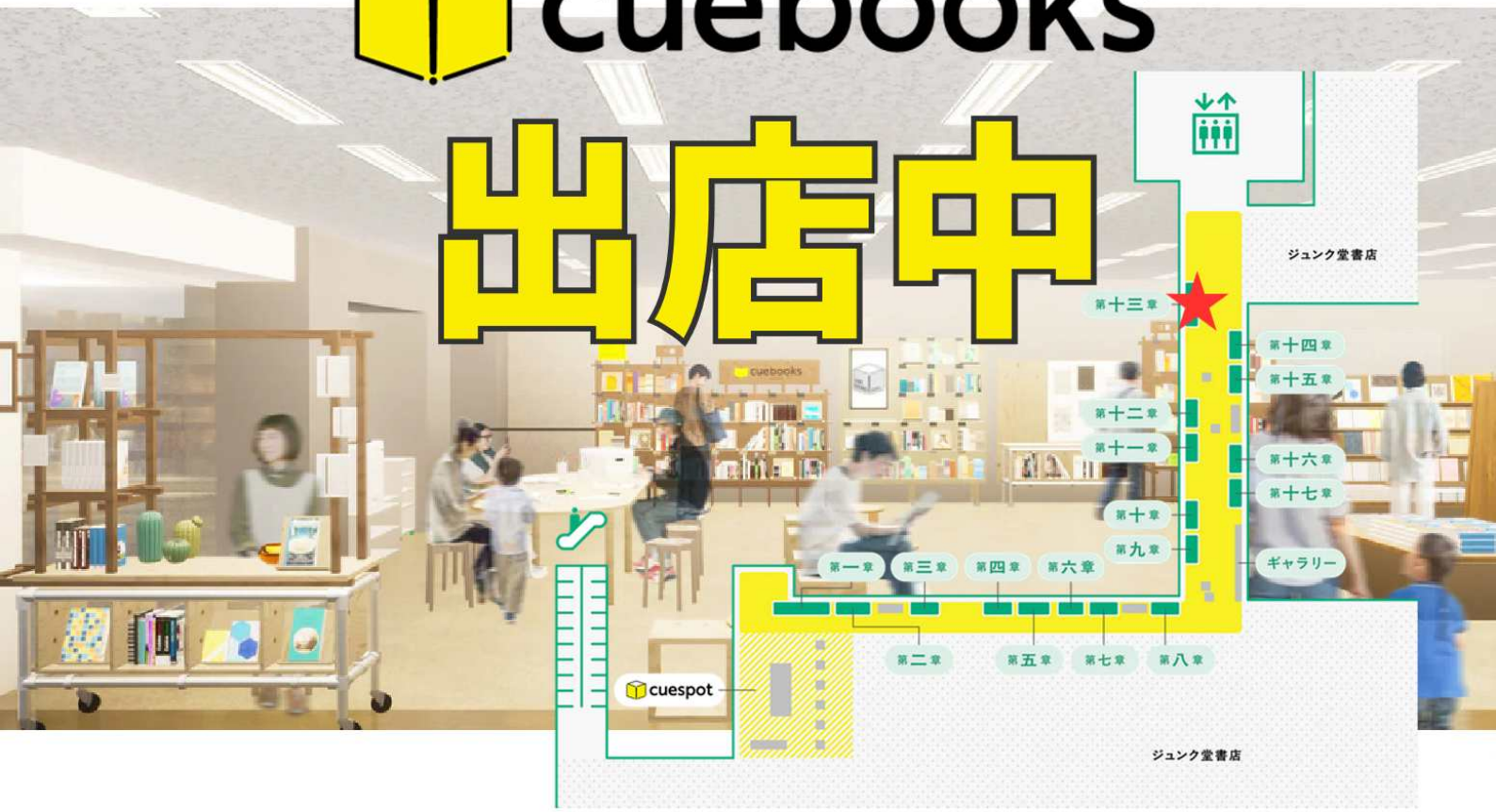


ずっと理解して
もらえるのが
安心だね！

ジュンク堂書店 大阪本店

cuebooks

出店中



cuebooksとは

堂島アバンザのジュンク堂書店で行われているシェア本棚です。ジュンク堂の本棚をひとつレンタルし、1日店長などさまざまなイベントを行えるcuebooks。そうそうの杜も参加し、本棚の運用を始めました。法人内で出版した本のみならず、利用者さんの作品や、店舗のスイーツなどを販売していく予定です。

常設本棚のみならず、イベントの際にはぜひお立ち寄りください。

棚番号 第十三章 231





各種イベント

1日店長ブースや、イベントスペースでのイベントを予定しています。

予定

手芸イベント

メルカリ事業で取り扱っている商品の店頭販売や、法人内の作品を販売いたします。

出張店舗イベント

Lianの杜、おいもの国のアリスの手作りスイーツを販売いたします。



本のご寄付のお願い

ご不要なご本のご寄付をお願いいたします。ジュンク堂本棚や、メルカリ等での販売に活用いたします。また、しおりやブックカバーなど、本にまつわるものも、ご不要なものがございましたらご寄付をお願いいたします。

ジュンク堂書店 大阪本店
大阪府大阪市北区堂島1-6-20
堂島アバンザ2階・3階
営業時間：10:00~21:00

NEWS

APPA
PRINT
SOUSOU



オリジナルアパレル
どこよりも安くきれいに
1着からご注文承ります

オリジナルTシャツユニフォームやトートバッグ、マグカップなど、ぜひご依頼ください。



アパレル卸メーカーと契約。自前のプレス機で、作業のすべてを利用者さんが行っております。



今冬は法人のアウターを200着制作し、作業の熟練度も上がっております。



そうそうの杜なら印刷だけでなくデザインから承ります！
気軽にご相談を。

1着からお気軽に

そうそうの杜 Links

YouTube



1 關宏之『福祉の本質』

柔らかな切り口で福祉の本質に迫る、そうそうの杜相談役關先生の福祉講座



2 多田康秀のプロ野球速報

野球をこよなく愛する多田康秀が、プロ野球ニュースを熱く語り尽くします



3 Prife SMILE TV

利用者発信！ Prifeにまつわるさまざまな動画を配信するチャンネルです



4 もりのひより

そうそうの杜初のVTuber！商品紹介からイベントレポートやおもしろ企画まで！

Instagram



1 Kawasemi



2 杜のShokudo



3



4 おいもの国のアリス Alice in Potateland



5 杜のこうさてん



6 そうそうの杜(インスタ)



7 そうそうの杜(X)



8 鴫野活性化プロジェクト

Online



1 Amazon電子書籍

そうそうの杜出版部から、絵本やエッセイなど珠玉の作品がAmazonKindleで発売中



2 今中さんLINEスタンプ

LINEスタンプ好評発売中！「ビンちゃんスタンプ(挨拶)」で検索してね！



3 中島さんLINEスタンプ

LINEスタンプ好評発売中！「目を閉じて、夢を開け」で検索してね！

そうそうの杜は

税額控除対象法人です

ご寄付で控除を受けることができます

メリットの大きい方をご選択ください

税額控除 小口の寄付に減税効果

所得金額にかかわらず小口の寄付にも減税効果
（寄付金額 − 2,000円） × 40%（定率） ⇒ 減税額

例…5万円のご寄付
（50,000円 − 2,000円） × 40% = 19,200円
（但し、所得税額の25%が限度）

所得控除 大口寄付に減税効果

所得金額と寄付金額が多いほど大きな減税効果
（寄付金額 − 2,000円） × 所得税率（5〜45%） ⇒ 減税額

例…5万円のご寄付（課税所得金額が500万円の場合）
（50,000円 − 2,000円） × 20% = 9,600円（但し、寄付金額は年間所得金額の40%が限度）

2026/1〜2026/3 ご支援いただいた方（敬称略）/ 機関誌をお送りいたします。

外川 鉄治、稲岡 了三、野間 満典、森 貴宏、伊藤 光子

当法人の理念や事業、目的に賛同される方、
事業活動へのご支援をいただける方に寄付をお願いしています。

寄付の手順

銀行振込

下記までお振込ください。
ゆうちょ銀行
口座番号
00940−5−185986
振込先（加入名）
社会福祉法人　そうそうの杜

物品寄付のお願い

利用者さんの作業にするため、ご不要なものがございましたらご寄付をお願いいたします。

本、雑貨など大歓迎です。よろしくお願いいたします。



ご支援、ご寄付いただき心より感謝申し上げます。


そうそうの杜
MAP
城東区役所
3
とことこっと
Kawasemi
城東警察署
POLICE
地下鉄蒲生四丁目駅
N
聖賢小学校
10
いま福の家
今福小学校
地下鉄鴫野駅
1番出口
8
伝 / 庵
城陽中学校
JR鴫野駅
P
コノミヤ
セブンイレブン
6
つむぎ館
望
鴫野小学校
13
Lian
王将
2
就ポツ
1
本部
杜のShokudo
心
5
座座
城東小学校
今里筋
17
だがしや
15
ざっかや
11
添
14
アリス
16
いばしょ
南しぎの商店街
9
げんげん
7
創奏
12
こうさてん
城東消防署
4
Prife
ジャパン
地下鉄緑橋駅

1 法人本部

本部としてすべての支援の発信点となっています。利用者さんたちが笑顔で立ち寄る場所です。

1 杜のShokudo

就労継続支援Ｂ型

発酵食ビュッフェとして調理では一人一品以上作っていただくことを目標とし、商店街のサテライト等、多角的な事業を展開しています。

1 心

自立訓練

日常生活のスキルのみならず、支援学校から事業所につなげていくための支援を行っています。

2 地域生活支援センターあ・うん

相談支援事業

仕事に関すること、生活に関すること、障害福祉サービスに関すること等々、各種相談を受け付けています。

2 大阪市障がい者就業・生活支援センター(北部地域センター)

あなたと企業を結びます。就職に関する総合的な支援を行っています。
※大阪市の機関になります。

3 とことこっと

居宅介護・重度訪問介護・同行援護・移動支援・訪問介護

生活の安心を支えています。

3 発酵薬膳&cafe kawasemi

就労継続支援A型

発達障害がある人の就労の場として、１日7時間の労働・最低賃金・社会保険等を保証、経済的な自立と働き甲斐のある職場を目指しています。

4 Prife

就労継続支援Ｂ型/移行/定着

就労にまつわる様々な支援を行っており、B型としての事業とともに、移行定着として一般就労を支援しております。

5 座座

就労継続支援Ｂ型

自閉症の方が多く利用されている作業所です。それぞれの特性や能力に応じた生産活動や社会活動に取り組んでいます。

6 つむぎ館

就労継続支援Ｂ型

にぎやかで家庭的な雰囲気の中にも、仕事場としての意識を持ち作業に取り組んでいます。生活をより豊かにしていくための活動の場として機能しています。

6 望(のぞむ)

就労選択支援

就労先や働き方について、あなたの希望や適正に合ったよりよい選択ができるよう支援するサービスです。

7 創奏

生活介護

幅広い年齢層の人が利用されています。その人の利用目的に合わせて相談し合いながら一緒に決めていきます。

8 庵

生活介護

リフト浴が出来る機械浴と一般浴と大小２つ入浴できる風呂があり、個々人にあわせた様々な入浴に対応できます。

8 伝

児童発達支援・放課後等デイサービス

感情を育てる療育を中心として、子どもが自分で考え、気付いて行動が出来るような関係性の向上を目指しています。

9 げんげん

生活介護

利用者のみなさんが、積極的に地域と関わる事や、創作活動、散歩、ゲームなどの遊びを通して「今日一日楽しかった」と感じてもらえるよう取り組んでいます。

10 いま福の家

生活介護・共生型通所介護・
共生型介護予防型通所サービス

民家であるため自宅のような安心感が得られます。障害者支援のノウハウに基づき、いきいきと過ごせる家庭的な支援と美味しい食事を提供できることが特徴です。

11 添

短期入所

個室。ショートステイは、家族の入院、グループホームや一人暮らしなどの地域生活への移行のための練習など、各々の目標に沿って支援しています。

12 杜のこうさてん

子育て支援事業

就学前の子どもを持つお母さんたちの居場所として、乳幼児から幼児までの憩いの場所であり、育児中の交流拠点となっています。

13 Lianの杜

手作りのパン、スイーツを販売しています。製菓、店頭販売に従事していただいています。

14 おいもの国のアリス

おいもを使った美味しいスイーツの製造販売しているかわいいお店です。

15 杜のざっかやさん

おいもを使った美味しいスイーツの製造販売しているかわいいお店です。

16 杜のいばしょ

地域交流

地域の方が交流する場所として、さまざまな試みを行いながら、困りごとの相談含め、地域の多面的なサポートを行っています。

17 だがしやさん

商店街のだがしやさんという安心して過ごせる環境の中で、店頭業務をしていただいています。

- 地域生活サポート事業

ひとりひとりがその人に必要な支援を受けながら暮らしています。そこから、就職先や事業所に通っている人がいます。

社会福祉法人そうそうの杜



法人本部
城東区鴫野東3-2-26
Tel/06-6965-7171
Fax/06-6167-2622



地域生活支援センターあ・うん
相談支援事業
城東区鴫野東3-2-28
Tel/06-6969-8123
Fax/06-6167-2622



北部地域センター（大阪市障がい者就業・生活支援センター）
城東区鴫野東3-2-28
Tel/06-6955-9921
Fax/06-6167-2622



とことこっと
居宅介護・重度訪問介護・同行援護・移動支援・訪問介護
城東区中央1-6-29 2F
Tel/06-6167-7530
Fax/06-6955-8826



Prife
就労移行支援・就労継続支援B型・就労定着支援
城東区東中浜2-2-19
Tel/06-6923-8959



座座
就労継続支援B型
城東区鴫野東3-2-12
Tel/06-4258-6013



つむぎ館
就労継続支援B型
城東区鴫野西5-13-6
Tel/06-6180-6820



Kawasemi
就労継続支援A型
城東区中央1-6-29
Tel/06-6935-1111
Fax/06-6935-1911



杜のShokudo
就労継続支援Ｂ型
城東区鴫野東3-2-26
Tel/06-6955-8080
Fax/06-6167-2622



創奏
生活介護
城東区鴫野東3-3-1
Tel/06-6923-8929



庵
生活介護
城東区鴫野東2-26-18
びんの郷 1F
Tel/06-6958-4745



伝
児童発達支援・放課後等デイサービス
城東区鴫野東2-26-18 びんの郷 2F
Tel/06-6958-4746



げんげん
生活介護
城東区鴫野東3-18-5
Tel/06-6180-9670



いま福の家
生活介護・共生型通所介護・共生型介護予防型通所サービス
城東区今福南4-15-33
Tel/06-6180-7399



心
自立訓練
城東区鴫野東3-2-26
Tel/06-6965-7171
Fax/06-6167-2622



添
短期入所
城東区鴫野東3-2-5
Tel/06-6167-5395



杜のこうさてん
大阪市つどいの広場事業
城東区鴫野東3-3-3
Tel・Fax/06-6961-5505



望（のぞむ）
就労選択支援事業
城東区鴫野西5-13-6
Tel・Fax/06-6180-6820

鴫野商店街内 サテライト



Lianの杜



おいもの国のアリス



杜のざっかやさん



杜のいばしょ



だがしやさん

鴫野商店街に地域の憩いの場所・杜のいばしょができました。冷暖房とウォーターサーバー完備、利用自由です。

